

本当に知りたいことばかり、興味深々で講演会・シンポに参加。

まだまだ 謎に包まれたままですが、聴講した中で知ったことなどを 私の独断 無手勝流でまとめました。

(シンポジウム講演のまとめではなく、私の理解・解釈まとめであること
ならびに、一部 講演・シンポで出なかった資料についても 補足しています。
ご注意ください。)

「五斗長垣内遺跡・ごっさ かいと遺跡」は平成 21 年 1 月、播磨灘を望む淡路島の北部丘陵地の尾根筋から大規模な鉄器工房群 (12 棟) を含む 23 棟の竪穴建物跡が発見され、弥生時代後期 (2 世紀後半) としては国内最大規模となる鉄器生産集落と淡路市から発表され、一躍脚光を浴びた。

当初「垣内遺跡」として発表されましたが、遺跡のある地名を入れて正式名「五斗長垣内遺跡」と命名された。

現在 五斗長垣内遺跡周辺は、国指定史跡化を目指して、遺跡を活かした地域づくりに、淡路市、兵庫県、地域住民が連携して取り組んでおり、遺跡そのものはすでに埋め戻されているが、尾根筋の上方に遺跡全景を一望できる展望台が整備され、播磨灘や家島諸島など遠方の景色も見渡すことができるようになっている。

また、遺跡の傍らには 地域の人たちによってモニュメントとして 竪穴住居(鍛冶工房)が作られ、本年 12 月 18 日には弥生時代の鉄器づくりが体験できる工房「ごっさ鉄器工房」1 棟が完成する。

今後、「ごっさ鉄器工房」を中心として体験学習事業を展開するとともに、地域の新しいシンボルとして活用するという。



現在、国指定史跡化及び遺跡を活かした地域づくりに整備中の五斗長垣内遺跡 2010. 10. 31.

1. 五斗長垣内遺跡の概要

伊藤宏幸氏(淡路市教育委員会)講演「五斗長垣内遺跡と淡路島の弥生遺跡」より整理

1. 五斗長垣内遺跡の位置と遺構概要

弥生時代後期初め AD 20・30年頃からAD200年頃 後期末まで 淡路島北部 津名丘陵の西側 播磨灘を望む海岸から約3km入った 標高200m播磨灘を見下ろす南北の尾根筋の西面から東西に延びる枝尾根上 南北 約50m 東西約500mの範囲で約170年間 継続的に維持された集落遺で、23棟の竪穴住居のうち13棟に鍛冶遺構がある国内最古・最大級の鍛冶工房村遺跡。この遺跡で一番古いSH-204はどうも石器工房でこれがスタートで、その後 鍛冶工房へ移って行ったと考えられている。約170年間で5期にわたり 2~3棟の鍛冶工房が枝尾根上を移動しつつ維持されたとの報告であった。但し、通常の集落と異なり、生活臭の痕跡は見られず、鍛冶工房を営む高地性集落とみられる。



五斗長垣内遺跡の遺構配置図

赤○内の数字は 遺跡出土建物跡を約30年刻みに5期に分けて時代を区分した数字

伊藤宏幸氏(淡路市教育委員会)講演より

- ◆ 形状 円形 16棟 方形 or 長方形2棟 隅丸長方形5棟
- ◆ 規模 最大規模 SH-302 直径10.5m 10本柱
- ◆ 炉跡のある建物 12+1 13棟
- ◆ その他 掘立柱建物跡1~2棟 溝 土坑
- 炉跡構造 掘り込みのない床面をそのまま炉底とした構造(村上分類Ⅳ類)で羽口出土せず

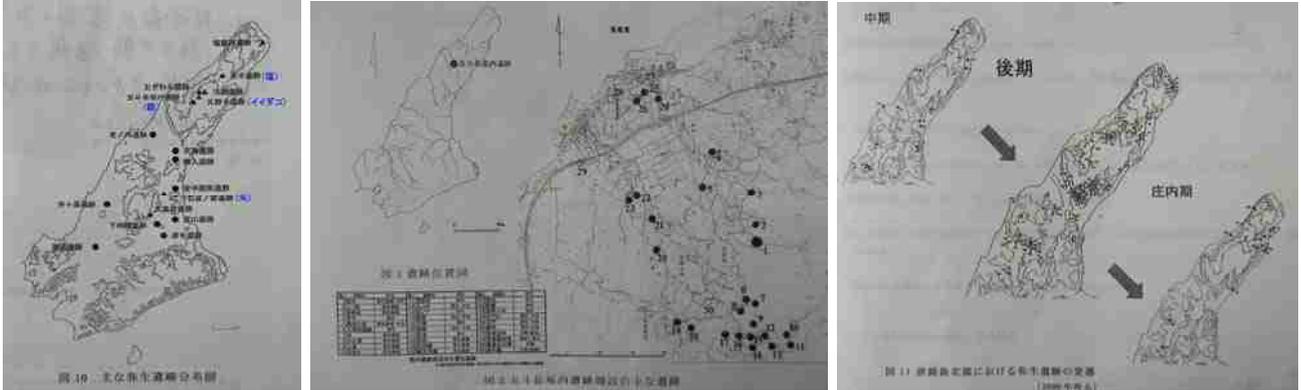


2. 五斗長垣内遺跡周辺の集落

五斗長垣内遺跡のある淡路島北部のこの津名丘陵周辺では 五斗長垣内遺跡と同様に この 1~2 世紀 丘の上の高地性集落と麓の集落が数多く出現し、2 世紀末頃消え去る。

(卑弥呼の時代である 3 世紀後半にはこの丘陵地周辺の大半の集落はすべて消えてなくなる。)

また、この淡路島北部丘陵地にある高地性集落群の中で 五斗長垣内遺跡が「鉄」 舟木遺跡が「塩」 穴郷遺跡が「イイダコ」の生産工房だったらしい。



弥生時代後期 淡路島北部の弥生集落遺跡の興亡

五斗長垣内遺跡もこれら高地性集落や山麓の集落とともに弥生後期末には消え去り、卑弥呼の時代には引き継がれない

3. 五斗長垣内遺跡 出土品

1. 120 点を越える鉄製遺物が見つかり、そのうち 70 点以上が弥生時代の建物跡から出土

鉄鏃などの小型の製品とともに板状・棒状の鉄片や裁断片などの鉄素材が多数出土し、鍛冶作業が行われていたことを示す。

また、竪穴建物跡 SH-303 から出土した大型鉄製品は板状鉄斧であった

2. 石器：叩石・台石・砥石など

3. 弥生土器：壺・甕・鉢・高杯・器台などの一般的器種(小型土器・絵画土器を含む)

コンテナ約 200 箱に上る土器片が出土



● 小型鉄製品と数多くの裁断片が出土し、かつ 炉の構造や刃口が見つからぬことなどから、鑿切り加工が主の鍛冶工房とみられる。

また、出土した大型鉄製品は、「板状鉄斧(てつぱ)」と呼ばれる鉄製の斧と確認された。

鉄斧は長さ 17・9cm、厚さ 1・3cm、刃部幅が 4・9cm、基部幅が 3cm、重さ約 263g。

基部が狭く刃部にかけて広がるバチ型をしている形状と、両側面から丁寧な鍛打が施されている製作技法などの特徴から、国内で製作されたものではなく朝鮮半島南部で製作された可能性が高いと新聞で知りました。

● コンテナ約 200 箱に上る土器片が出土し、土器片の解析などをもとに個々の竪穴住居の年代が検討された。

土器に年代幅があることなどから、1世紀中頃～3世紀初めにまたがる遺跡であることが確認された。

また、一つの高坏の土に着目し、に注目し、「これは丹波系」との見方があり、鉄素材の輸入ルートとして朝鮮半島からの直接ルート、九州や瀬戸内経由のほか、日本海ルートも今後、検討する必要があるという。

(五斗長垣内遺跡の出土品調査状況の淡路市教育委員会から発表新聞記事より)

伊藤氏は講演のまとめとして 五斗長垣内遺跡の位置づけとして

「五斗長垣内遺跡の発掘を含め、淡路島では 遺跡の状況が弥生時代の中期と後期で大きく変化することが明らかになってきつつある。この後期の大きな変化の中で この五斗長垣内遺跡を考えることで、今後 この五斗長垣内遺跡の時代的位置づけや役割が今後明らかになるだろう」と結んだ。

2. 五斗長垣内鍛冶遺跡の時代的位置づけ まとめ

村上恭通氏(愛媛大学東アジア古代鉄文化センタ長) 講演「弥生人が目指した鉄器化社会」より整理



激変する弥生時代後期 「弥生の戦々」の時代。 高地性集落が現れ、実用鉄器が西から東へ急速に普及していった時代であるが、村上氏が注目するのは 弥生人の鉄器に対する価値観が地域によって大きく異なっていると指摘する。

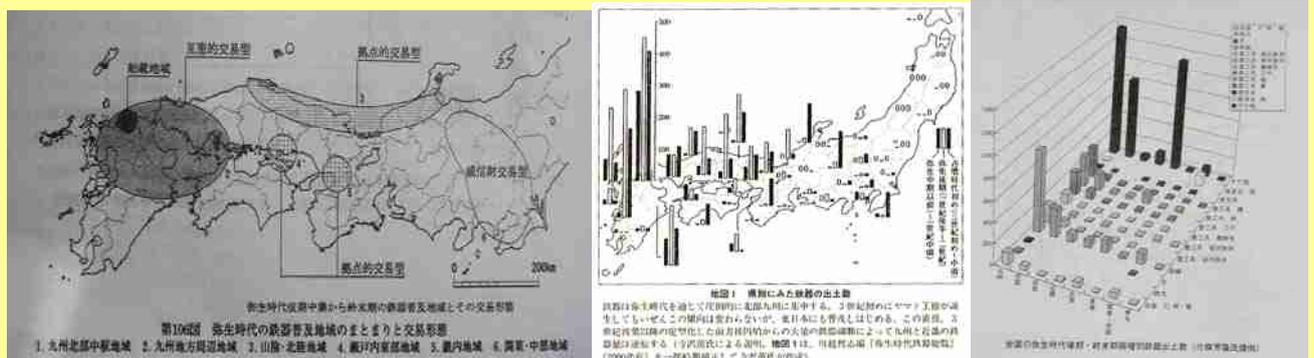
この時代 日本では鉄素材が自給できず、朝鮮半島の鉄に頼っていた時代である。 鉄素材の流通を北部九州握られ、鉄の入手がままならぬ各地では、鉄製武器や船載鉄器に対する信仰[威信財]に地域差が大きく生じていた。

朝鮮半島に近い北部九州では 鉄素材の量も質もそしてその加工技術を他の地域に比べはるかに優れ、日用鉄器・利器を充実化する社会に入っていたという。一方 北部九州から遠く離れた中部・関東では 鉄素材の供給はままならず、非日常的な鉄器を求める社会であり、関西以西では、鉄素材も十分でなく 技術も遠く北部九州に及ばず、集落出土土器が多い地域と埋葬跡出土土器の多い地域の相違が顕著であった。



弥生時代後期 北部九州と関西以東の鉄器の比較 写真中央は五斗長垣内遺跡出土鉄器と鉄片

【参考】弥生時代 地域別鉄器出土数の変遷 (シンポとは別資料から参考に補足添付)



弥生後期 西から東へ普及してきた実用鉄器の先端技術の先端は ちょうど丹後・播磨・淡路・徳島の南北ライン近辺で それより東側では まだまだ 石器が中心の時代であるが、急速に鉄器化が進んでゆく時代で、かつ 集落が地域集落から地域連合・首長国へと集団化が進み、西日本・関西では戦いが頻発する弥生の戦さの時代、高地性集落が起こり、鉄器への需要がさらに高まる時代である。

そんな先進技術「鉄」伝播のフロントに位置する淡路は近畿の鉄器化への先端地。 五斗長垣内遺跡もこの時代の流れの中に位置づけられると考えられ、村上恭通氏は この時代背景を元に五斗長垣内遺跡の位置づけを考えたいと述べられた。

村上恭通氏の意見要旨は次の通り。

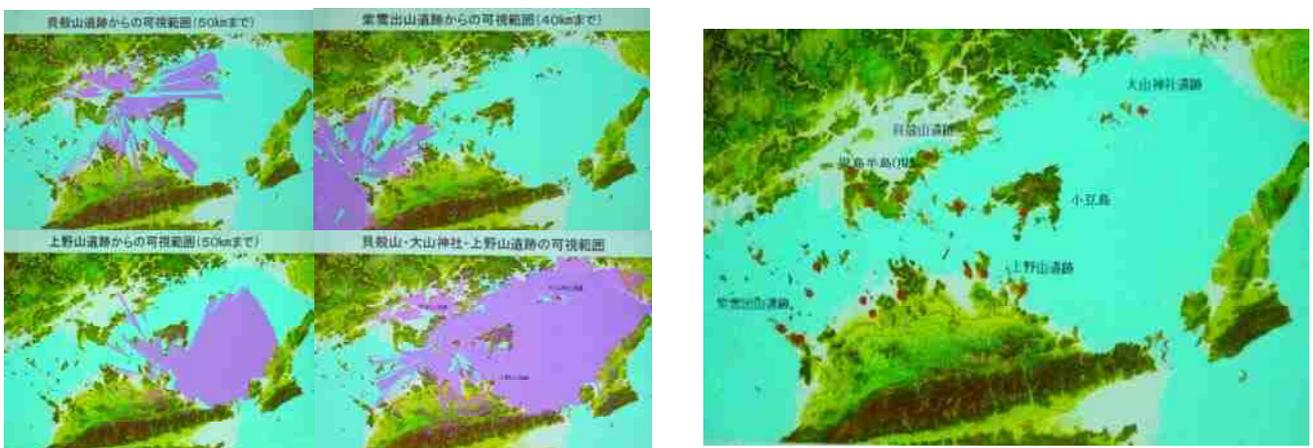
- ① 炉床編年でⅣ期（床上で直接火入れを実施、炉として溶解に必要な高温を維持できない）800度程度が限界だったと考えられる。また、出土する鉄製品は大型の鉄器はみあたらず、小物の鉄器製作であり、薄い鉄素材か棒状の小さい鉄素材を鑿切り加工で鉄製品を作った鍛冶工房と考えられ、断裁鉄片も多数みつかっており、北部九州のような本格的な高温鍛接技術は入っていない。
- ② 北九州で始まった鉄の鍛冶加工の弥生時代中期以降の歴史をたどると 鉄器の普及は東から西へ前進するその過程で時代が後になるほど、鍛冶炉が簡易型に退化する傾向がみられ、この五斗長垣内遺跡の鍛冶炉も退化簡易型の鍛冶炉で羽口も出土していない。
- ③ 鍛冶工房内で見つかった大型鉄製品は当初鉄素材か?と期待されたが、板状鉄斧と判明。鍛冶炉の構造などからするとこの厚くて硬い板状鉄斧を鉄素材として使いこなせる技術はなかったと考えられる。
- ③ これらを合わせ考えてゆくと 現段階では この鍛冶工房が大和や卑弥呼など大集団とつながる広域流通の鍛冶工房とは考えられず、周辺近隣集団へ小物鉄器中心の鉄器を提供する鍛冶工房であると考えられる。
- ④ (卑弥呼の時代にはこの鍛冶工房は消失。周辺の集落もほとんど消失して 卑弥呼の時代まで集落の継続もない) この五斗長垣内遺跡の役割は 現段階では周辺近隣集落群の連携対象の鍛冶工房であったと淡路の狭い地域対象の鍛冶工房と考えたい。

「五斗長垣内遺跡は卑弥呼・大和王権の時代につながる畿内の鉄流通の供給基地の先駆けではないか???'と古代のロマンを夢見てきましたが、どうもそうとは言えないというのが、現段階の結論のようだ。

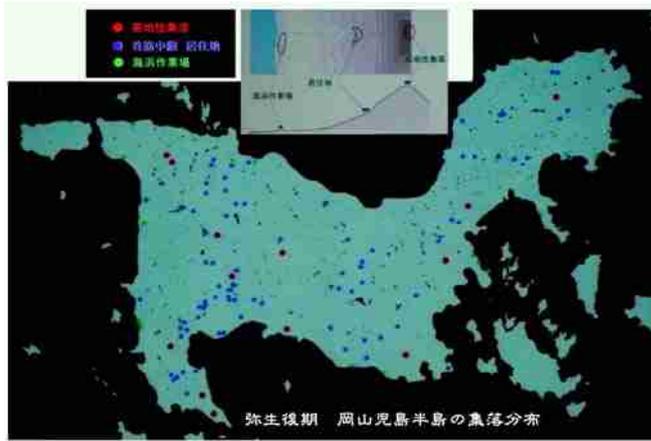
3. 弥生後期の和鉄の道・Iron Road

「播磨灘と五斗長垣内遺跡を考える 瀬戸内をめぐる交流・地域間関係」大久保徹也氏(徳島文理大) 講演より整理

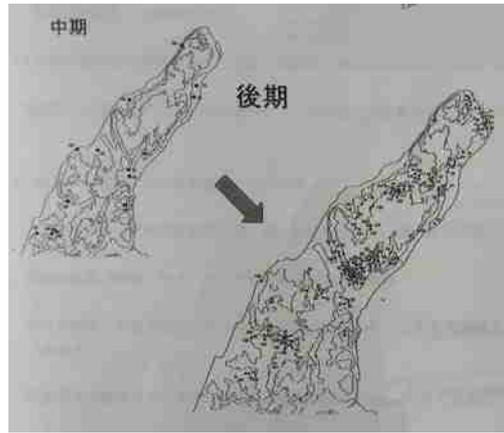
淡路島の西 瀬戸内海 児島湾・小豆島地域の弥生集落遺跡は弥生中期～中期末に集中し、後期には消失する。この時期に淡路では集落が集中する。これら瀬戸内沿岸の集落の立地パターンは「海浜作業場+山麓谷筋奥の居住地+高地性集落」となっていて、これらの集落が相互に連携していたことがよく判る。一つの高地性集落では全方位を見渡すことができないが、周辺の高地性集落が連携すると全方位が監視でき、この連携が行われていたのではないかと大久保徹也氏は推定する。



瀬戸内海 備讃瀬戸・播磨灘周辺の高地性集落の連携による全方位監視の推定



弥生後期 岡山児島半島の集落分布



弥生後期 淡路島北部の集落分布

弥生時代 後期 東部瀬戸内海・淡路島北部のの弥生集落分布

「海浜作業場+山麓の谷筋奥の居住地+高地性集落」の集落構成パターンで、相互に連携していたと考えられている五斗長垣内遺跡周辺の淡路島 北部綱丘陵地周辺の集落群も同じような集落連携が組まれていたであろうと推定する。

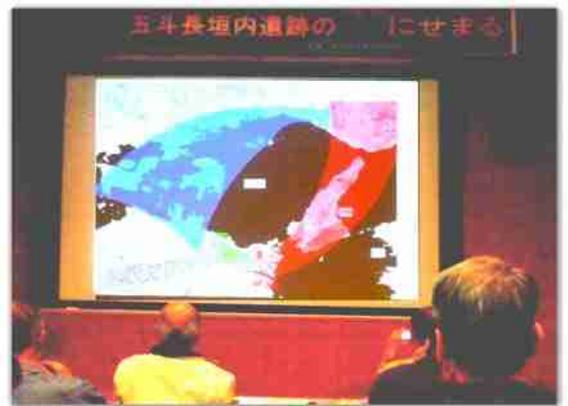
そして、これらの集落群は 戦さが落ちつく後期末には ほとんどが継続することなく消失する。

また、これらの連携をモノの動き・交流から眺めると吉備・播磨・讃岐・阿波連携の面白い姿が浮かび上がってくる。

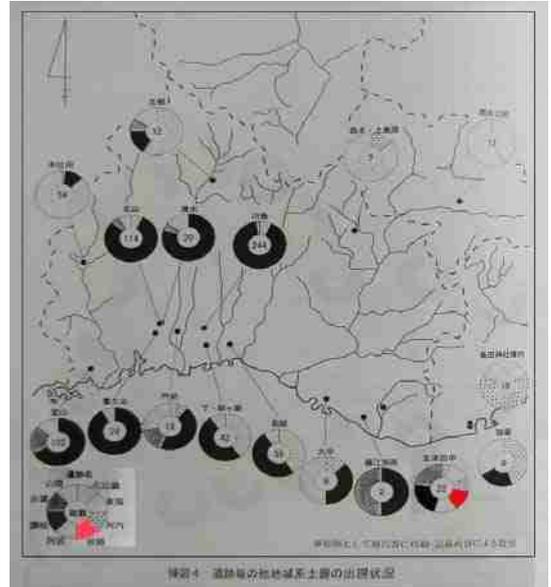
この地域のモノの動き・交流を初期土器製塩資料分布・銅鐸分布の変遷・大阪湾型銅戈&銅剣分布・鏡分布などより眺め、整理すると讃岐・吉備・播磨の交流はちょうど時計回りに交流路があったように見えるという。淡路島で見ると淡路の結びつきは明石海峡側からで、鳴門海峡側からの交流路は弱いという。

このことから大久保氏は五斗長垣内遺跡へつながる鉄の道は 吉備・播磨側からであろうと推定する。

(阿波もまた矢野遺跡など北部九州とつながる鉄の先進地の一つであるが、阿波から淡路へのルートはこの時代弱いとみられる。



弥生後期 五斗長垣内遺跡周辺の交流・伝達路



弥生時代の和鉄の道 瀬戸内の IRON ROAD

大久保氏の指摘する時計回りの東瀬戸内交流路や東瀬戸内の土器分布から見た地域交流から見ると、東瀬戸内・大阪湾を時計回りに回るルートが 西から東へ東瀬戸内・畿内への交流路 「弥生時代の和鉄の道 瀬戸内の IRON ROAD」と推定される。当初 阿波から淡路や紀伊への流通路も想定されると思っていましたが、この道は弱いようだ。

村上恭通氏が指摘する弥生後期の实用鉄器伝播の最前線が播磨・淡路・阿波のラインと符合するのも興味深い。

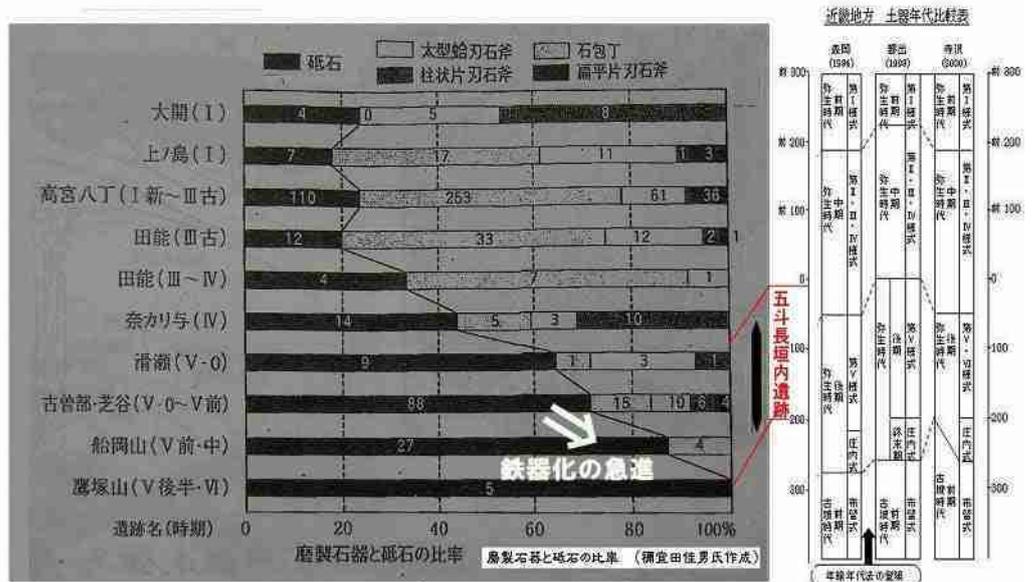
鉄器生産の技術は、朝鮮半島から九州北部を経て、日本海、瀬戸内海沿いなど複数ルートで東へ伝わったとされるが、その実態はよくわかっていないのが実状でしたが、空白地帯と言ってもよかったこの五斗長垣内遺跡の出現で、そのルートがかなりクリヤーになってきた。

今後さらに解析・研究が進めば この五斗長垣内遺跡「弥生の Iron Road」を解き明かしてくれると期待する。

4. 弥生時代後期 近畿でも急速に实用鉄器化が進んだことを示す石の刃物の変化

禰宜田佳男氏「近畿における石の刃物と鉄の刃物」よりまとめ

弥生の後期 近畿での鉄器での出土数は九州や山陰・丹後・北陸の鉄の先進地と比べ はるかに少ない。しかし、この時代の石器の減少を通して鉄器が普及。「見えざる鉄器」の存在に着目して、鉄器化の実態を考えねばならないという。高地性集落が東瀬戸内・大阪湾沿岸に数多く出現する弥生の戦さの時代でもある。五斗長垣内遺跡はそんな時代に近畿に現れた大規模な鍛冶工房遺跡である。



弥生時代後期(1世紀半ば~2世紀)には出土する石器のほとんどが礫石となり、石器製の農耕具の出土が激減する近畿地方においても この時代に实用鉄器の時代へ入ったことがうかがえる。(腐食等で鉄器の出土は少ないが、鉄斧の柄が出土するなど实用鉄器の時代へ入ったことがうかがえる)

弥生の後期 近畿地方での鉄器需要急増の変化を示出土石器の急変

[禰宜田佳男氏作成資料を基に整理して本図作成]

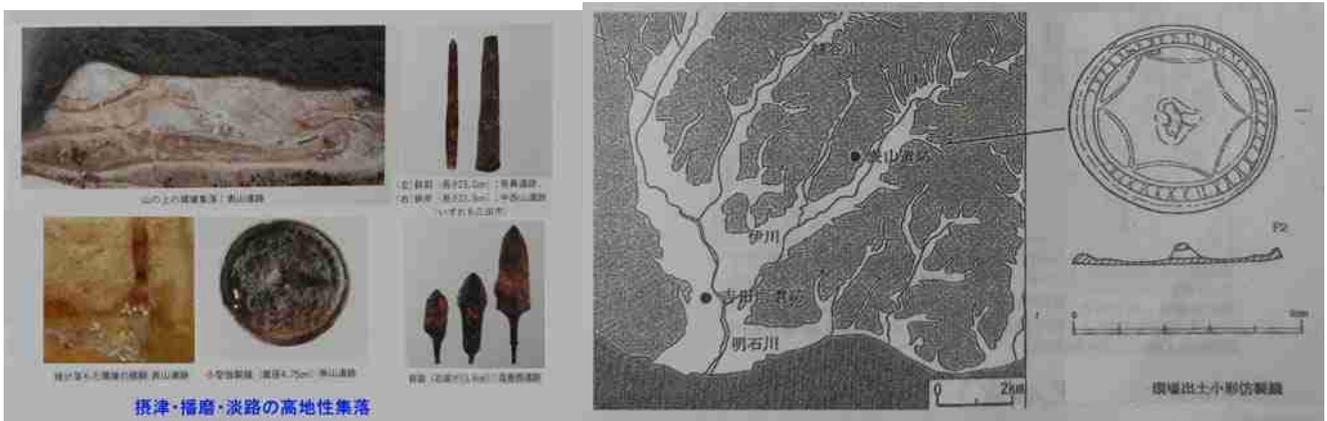
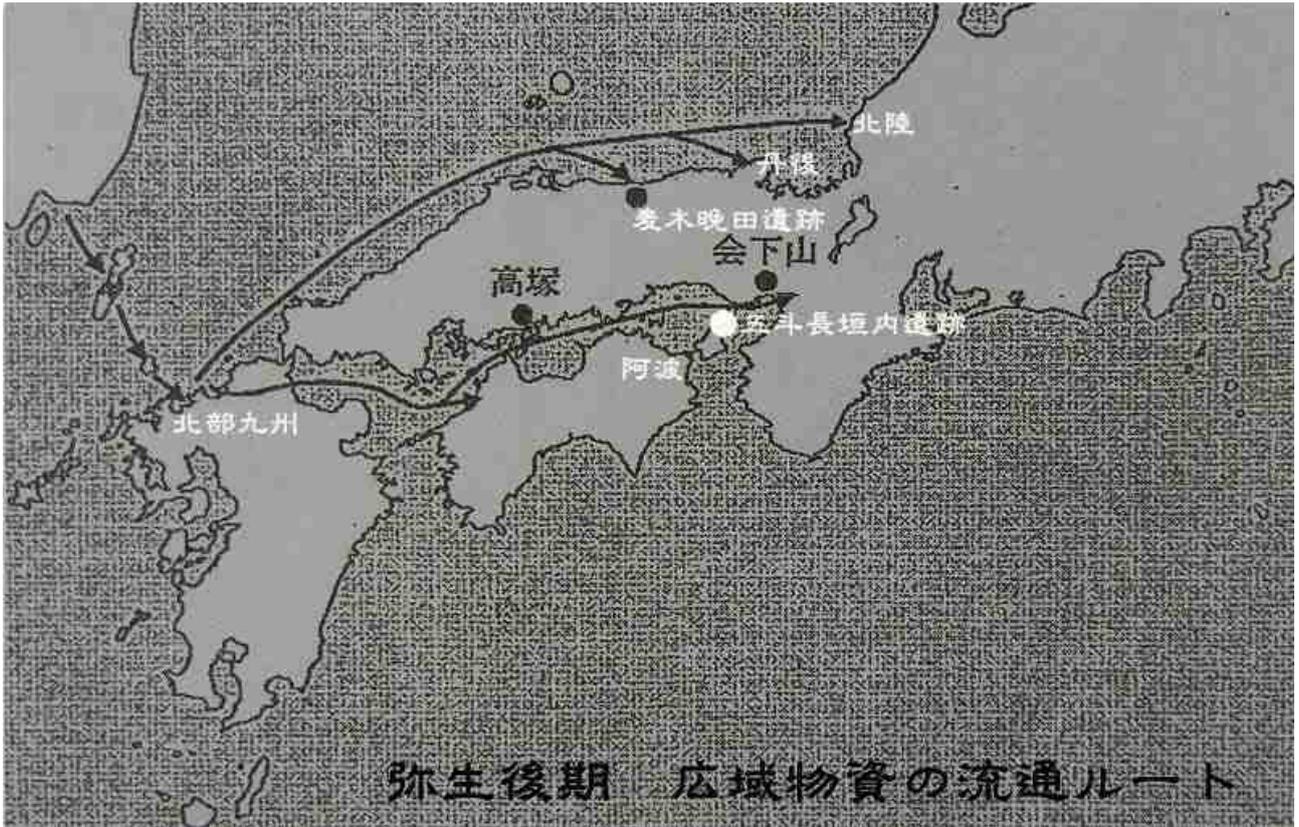
また、禰宜田佳男氏は 明石海峡を挟んで淡路島がすぐ目の前播磨と摂津の国境地帯をなす明石川流域は西から東への交流路の重要地点と指摘する。六甲山脈の険しい山並みが神戸の西で海に落ちる地点で丘陵地が連なるところで、この明石川沿いは早くから開け、幾つもの高地性集落を伴う弥生の集落群があった。六甲の山並みと明石海峡の急流に阻まれ、弥生・古代の流通路は海岸沿いを離れ、明石川を遡って山を越えてゆく。鉄器や青銅器が近畿で一番早く出土するなどの先進地であり、



明石平野(明石川流域)の弥生時代の遺跡分布

石器流通、鉄器・青銅器流通における拠点ではないかという。

(玉津田中遺跡で鑄造鉄斧の柄(中期) 表山高地性集落遺跡で近畿で一番古い小形仿製鏡の出土)



5. まとめ

平成21年1月 「卑弥呼の時代に入る前夜 弥生時代の後期 1世紀初頭から2世紀末までの約170年間 淡路島の北部の丘陵地に継続して営まれ、卑弥呼の時代の到来に呼応するかのように 周辺の集落群とともに消えて行った日本最大級の鍛冶工房遺跡 五斗長垣内遺跡」が出土したと発表され、この鍛冶工房の位置づけ・役割の解明が日本の古代史を解き明かす鍵になるとセンセーショナルに取り上げられた。

時代は石器から鉄器へ移り変わる時代 豊かな農耕文化が開くとともに 集落の拡大連携による集団化が進み、次第に地域集団 さらに地域首長国へと展開し、この地域終端の拡大の中で 西日本では弥生の戦さが繰り広げられた時代である。

日本各地で鉄器に対するイメージは異なっていたとしても、西から東へ 大陸・朝鮮半島の新技术とともに鉄器の重要性が強く意識され、近畿・畿内を含む西日本ではその使用が急速に進んでいった時代である。

そんな時代背景の中 忽然と鉄の空白地 淡路島に出現した竪穴住居 23棟 うち13棟が鍛冶工房という日本最大級の鍛冶工房遺跡 五斗長垣内遺跡。

発掘から2年 これまでの調査で分かったことを中心に この五斗長垣内遺跡が謎に包まれたこの時代をどのように語るのか??興味津々の連続講演会とシンポジウムでした。

最大の関心事は この五斗長垣内遺跡の役割と位置づけ 五斗長垣内遺跡の謎の解明である

1. この鍛冶工房を統治していたのは 誰なのか そして それは その後の時代 卑弥呼の邪馬台国
そして 初期大和王権へとつながる大鍛冶工房なのか
2. まだ、鉄素材を朝鮮半島に頼らねばならぬ時代 鉄の先進地 北部九州からどんなルートがこの淡路島
そして畿内へ伸びていたのだろうか

調査報告が継続中の今 まだまだ 解明には時間がかかると思っていたのですが、いつも 断片的にしかもセンセーショナルにしか語られなかったこの時代が冷静に語られ、よく知らなかったこと 見えてこなかったことが 数多く頭の中に入ったことは大きな収穫。

● この五斗長垣内遺跡の役割と位置づけ 五斗長垣内遺跡の謎の解明

五斗長垣内遺跡は卑弥呼・大和王権の時代につながる畿内の鉄流通の供給基地の先駆けかとも思っていたのですが、村上恭通氏は鍛冶工房の質・周辺の高地性集落との同時性などから 垣内遺跡周辺の狭い地域への鉄器基地との考えを話された。

卑弥呼・初期大和王権へのつながり その後現れる畿内の大鍛冶工房群との関係をイメージしていましたが、ちょっと残念な気もしますが、気になっていた羽口の出土しない退化型の簡易神代炉 そして鉄製品の規模を考えると納得。

芦屋の高地性集落・会下山遺跡にも鍛冶工房があったと聞き、西日本の高地性集落には鍛冶工房を持つものが少なからずあると聞き、先日聞いた 阿蘇の阿蘇谷の鉄集積の集落群 鉄の集積の大きな妻木晩田遺跡等々を考えるとこの五斗長垣内遺跡を卑弥呼・大和の時代へつなぐ大流通拠点と考えるのは現時点ではちょっと騒ぎすぎなのかもしれない。

鉄器生産の技術は、朝鮮半島から九州北部を経て、日本海、瀬戸内海沿いなど複数ルートで東へ伝わったとされ、広域の鉄の流通経路「弥生の Iron Road」があったのは事実。

この「五斗長垣内鍛冶工房遺跡」が この「弥生の Iron Road」上で淡路島の枠を越えてもっと広い地域にまで役割を演じていたのかどうかは研究者の間でまだ 意見が分かれているようだ。

この時代 鉄の流通路を握る北部九州に対して、この鉄の流通路の確保を求めて、地域連携・集団化が進み、数多くの高地性集落を生む「戦さ」の時代。約170年間も継続的に維持され かつ 東瀬戸内をにらむ重要地点である。西から東への鉄伝播の最前線の位置にあるこの鍛冶工房遺跡がもっと大きな役割を演じていたかもしれないとする学者も多い。この謎はまだまだ これからである。

連続講演会で講演された森岡秀人・兵庫県芦屋市教委文化財担当主査は

- 「五斗長垣内遺跡は近畿に本格的な鉄器社会到来を証する重要な遺跡。
近畿と瀬戸内の中継点として、鍛造技術の導入や製品の流通に大きな役割を果たしたのではないかと。
この謎を解く鍵は鉄と交換された見返り品が何であったかだろう」と。

五斗長垣内遺跡の役割の解明はまだまだ これから。今後の解明検討に期待したい。

来年3月にはこの五斗長垣内遺跡の発掘調査報告書完成すると聞きました。

また、この五斗長垣内遺跡の保存化が決まり、この五斗長地域連携の中で 遺跡の整備・国史跡指定化がすすめられているのもうれしい。

● 高地性集落の意味づけが今回のシンポで浮かび上がってきて、頭の中に納得で入ったのも収穫。

高地性集落が周辺の集落と連携して、鉄ばかりでなく色々な物の生産基地の性格があることも面白い。戦さに備えて高地性集落が周辺の集落連携で周辺の敵を監視する機能を主にイメージしていましたが、平時には周辺集落連携の共同生産工房として機能し、戦になると周辺集落の逃げ込み場の役割を担っていたのかもしれない。

● 常々頭にあった明石川流域の弥生の高地性集落群の位置づけ

禰宜田佳男氏は 明石海峡を挟んで淡路島がすぐ目の前 播磨と摂津の国境地帯をなす明石川領域は西から東への交流路の重要地点と指摘する。

明石海峡に落ちる六甲の山並の国境越が西から瀬戸内海沿岸を進んできた交流路の大きなバリアになると実感していましたが、それが取りあげられたような気になっています。

六甲山脈の険しい山並みが神戸の西で海に落ちる地点で丘陵地が連なるところで、この明石川沿いは早くから開け、幾つもの高地性集落を伴う弥生の集落群があり、弥生・古代の流通路は六甲の山並みと明石海峡の急流に阻まれ、海岸沿いを離れ、明石川を遡って山を越えてゆく。

畿内地域に入る厳しい六甲の山越えが 日本海側から播磨そして四国へ南北につながる鉄の最前線を作り、この最前線に境に西と東での大きな鉄器普及の差を生んだのかもしれない。

そのバリアを越える重要ポイントが 淡路島であり、明石川流域と考えるとうれしくなる。



播磨・摂津の国境周辺を 淡路島側(写真右) 須磨旗振山側(写真左) から眺める

参考 和鉄の道 [リンクアドレスに変更した新しいリンクアドレスが隠れています](#)

1. 弥生時代後半 国内最大級の鍛冶の村 国生み神話の淡路島「垣内遺跡(鍛冶工房跡)」現地説明会 Walk 2009.1.25.
<http://buffalonas.com/mutsu/www/dock/iron/9iron02.pdf>
2. 一筋縄ではいかぬ古墳時代の幕開け 激動の時代淡路島がその鍵を握るのか ???
淡路島で発掘された卑弥呼の時代の日本最大級の鍛冶工房村の位置付けに思いをめぐらす
<http://buffalonas.com/mutsu/www/dock/iron/9iron04.pdf>
3. 弥生の高地性集落【3】 畿内と播磨の境 明石川・伊川流域
<http://buffalonas.com/mutsu/www/dock/iron/6iron12.pdf>
4. 弥生の高地性集落【4】 弥生の高地性集落に「弥生の戦」・「日本人のルーツ」を探して
<http://buffalonas.com/mutsu/www/dock/iron/6iron14.pdf>
5. 弥生時代から卑弥呼の邪馬台国・大和初期王権 日本統一国家形成へ 時代を動かした鉄
2010 年秋 関西各地で開催された博物館特別展とそのシンポジウム & 連続講演会 聴講まとめ
無手勝流で 鉄をキーワードに弥生から邪馬台国を経て大和王権への変遷を読む
<http://buffalonas.com/mutsu/www/dock/iron/10iron13.pdf>

参考資料

1. 弥生の鍛冶工房「五斗長垣内遺跡への道」 兵庫県立考古は菊物館・淡路市・淡路市教育委員会
2. 弥生の鍛冶工房「五斗長垣内遺跡への道」シンポジウム資料「五斗長垣内遺跡の謎にせまる」
村上恭通氏(愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター長) 大久保徹也氏(徳島文理大教授)
禰宜田佳雄氏(文化庁主任調査官) 伊藤宏之(淡路市教育委員会)
3. 弥生の鍛冶工房「五斗長垣内遺跡への道」連続講演会資料 ・ ・
足立敬介氏(淡路市教育委員会) 講演資料「五斗長垣内遺跡の発見 - 弥生時代鉄器工房群の発掘から -」
森岡秀人氏(芦屋市教育委員会) 講演資料「鉄と青銅 — 近畿弥生社会における金属器生産 —」
石野博信氏(兵庫県考古博物館長) 講演資料「おのころ島神話とヤマトの大王墓」
4. 播磨学研究所編「播磨から読み解く邪馬台国」